

『建築に内在する言葉』

(TOTO 出版、2011 年 1 月)

正会員 坂本一成 君

著者坂本一成氏は、建築家として設計した処女作の「散田の家」(1969 年)以来、約 40 年間にわたりつくった 21 作品とその都度個別に発表してきた論考の束が、「並列、併存的に構成された部分」による「全体性の逸脱」という氏の建築設計方法を暗示するかのよう
に編集され、「建築の開放、解体、解放」へと至る強靱な思索の過程が、著書『建築に内在する言葉』の第一部「建築の修辞」と第二部「建築意匠の論理」に構造化され、まとめられている。

建築に求められる自由な空間は、単に気ままな形態や新奇な空間表現ではなく、建築を構成している現実との日常的な連続と対立における葛藤から生まれるニュートラルな自由でなければならないとするのが著者の主張である。現実と日常に拮抗する建築空間の構成形式によって、現実を引き受けながら、一方ではそれを非現実化することなく超えてゆくこと、つまり現実ともう一つの現実との間の拮抗とせめぎあいによって日常の詩学を構築することが著者の作法である。したがって、坂本氏にとって、「建築に言葉を内在させる」ことが建築家としての当為であり、「建築に内在する言葉」を発見し、明確化することが氏にとっての建築論の目的である。その両者が互いを補完し合い、刺激し合って坂本一成の建築世界をつくり上げてきた。その意味で氏の建築作品と本著書は密接に結び付いたものであるが、首尾一貫した論理的考察と厳密な言葉により、読むものの世界や空間に対する共通感覚に訴える記述姿勢によって、普遍的な建築論の書としても実現している。すなわち、本書は現代において建築の可能性を真摯に探究し、開示したものとして高く評価することができる。

よって、ここに日本建築学会著作賞を贈るものである。